日本医師会JACR共催シンポジウム 全体報告

伊藤 秀美　JACR理事
愛知県がんセンター研究所

2014年から開始されている日本医師会との共催シンポジウムが、2018年12月8日に開催されました。今回で5回目となります。当日、会場である日本医師会館近くの六義園では紅葉が見頃で、駒込駅から会場へ向かう途中にある入り口は多くの見物客で賑わっていました。

それはさておき、過去のシンポジウムの内容を振り返ると、がん登録推進法施行を1年後に控えた2014年のテーマは「これからのがん登録とどう付き合うか」、がん登録推進法施行を目前に控えた2015年は「がん罹患・死亡の都道府県較差はなぜ起きる?」、がん登録推進法施行1年を経た2016年は「本当に増えているがん、減っているがん」でした。2017年のシンポジウム「始まった希少がん対策」からは、構成が二部から三部構成に変わり、第一部では、テーマに沿った分野でご活躍されている専門家を海外より招待し、世界における動向をご紹介いただく内容となりました。回を重ねるごとに、内容が日本においてがん登録情報をがん予防、医療、対策に最大限に利活用するにはどうしたらよいか、日本のがん登録の方向性を考えさせられる、より具体的な内容へと変遷、発展していっているように思います。

2018年のシンポジウムも三部構成での開催となりました。総合司会の役得で、私は各演者のご講演を壇上で拝聴し、↗「がん検診を正しく評価し、有効ながん検診を正しく実施すること」に対する各演者の熱い思いを間近で感じることができました。全体的な内容については、猿木理事長からご報告がありましたので、私は、特に国際がん研究機構のパルサ・バス先生のご講演の中でご紹介のあった「Canscreen5(5大陸のがん検診)」に焦点を絞りたいと思います。

Canscreen5は、バス先生が研究代表者として推進しているプロジェクトで、がん検診の実施・調査には有用な健康情報システムが不可欠である、質の高いデータを収集することで重要ながん検診精度管理指標の推定が可能となる、その精度管理指標は事前に標準化されるべきであるという考えに基づくものです。このプロジェクトでは、世界中のがん検診プログラムの特徴と実績について、定義や収集方法を標準化した上で情報を収集し普及させ、がん検診プログラムの品質管理・改善や情報に基づく政策の実現、健康情報システムの整備や強化、これらに関する研究に対し各国を支援することを目標としています。

上段左から松坂氏、伊藤(秀)氏、中山氏、永井氏、雑賀氏、大木氏、伊藤(ゆ)氏、斎藤氏、西野氏、松田氏、
下段左から山口氏、津金氏、バス氏、猿木理事長、今村副会長、羽鳥氏

JACR SYMPOSIUM 2018

有効ながん検診を正しく実施するために

がん登録への期待

↘講演で紹介されていたように、収集・分析された成果は、健康情報システムとしてオンラインポータル(http://canscreen5.iarc.fr/)上に整備され、もうすぐ公開されるようです。バス先生が、検診データベースとがん登録とのリンケージにより「中間期がん」の同定、検診精度管理指標(発見率、陽性反応的中度、上皮内がん・浸潤がん比率)の推計、「任意型検診プログラム」による発見がん割合の推計が可能となり、長期間の検診の効果を評価するためのキーとなると、がん登録情報の重要性について強調されていたのが印象的でした。

全国がん登録推進法に基づき2016年診断のがん罹患数の速報値が初めて公表されました。情報が安定するのにはしばらくかかりますが、精度的には国際標準と比しても遜色なく、これからはいかに活用していくかが重要になります。個人的には、がん登録に関わる疫学研究者として、どんどん活用し成果を様々な形で公表したいですし、日本にもCanscreen5のような健康情報システム、米国SEERのような情報提供システムなどの整備が進むとよいと期待しています。↗

↘以上やや脱線してしまいましたが、今後もがん登録情報の利活用をテーマとしたシンポジウムの企画を期待しつつ、日本医師会との共催シンポジウム2018のご報告と感想を終えたいと思います。